

——シミュレーション762終了。

評価、良好。

検体の思考誘導、並びに身体調整——進行中。
想定回数を438回オーバーする予想です。

「なるほどなるほど。抵抗も減って脳波も
安定してきたと……やっど、というところですか。
それじゃあ続いてのシミュレーション——開始」



「……………」

ここは……公園？

私、何でこんなところに……」

「戦闘中に考え事とは余裕だな。
ルセリア・エトワール」



「……ッ！」

オルデイスっ……!!」

（そうだった……私、オルデイスと戦ってたんだって）
「いつの間にか我の名を覚えたか」



「貴方だってずっと『女』呼びだったでしょう。」

「いつからか私の名前を呼んで……お互い様です」

「そうだな。我もこれだけ同じ相手と戦うのは

初めてだ……実に愉快的気持ちだ」

「私は飽き飽きしています。早く倒れてください」

（機械帝国ギアロス——異世界からの侵略者。
幹部であるこの男はなんとか倒さないと………！）

「はあああッ！」

「……っ！ 鋭い一撃だ。ならば………！」
「くっ………！」

（なんて速くて重い剣なの………まともに当たったら
一発でやられちゃう）



「流石だエトワール。我が唯一認めた戦士よ」
「貴方は本当にいつもそればかり……!!」

「……考えてみたらこの人、侵略者だけれど
街や人間に非道いことをしたりはしていない。
純粋に戦いを楽しんでる……?」



「我にとっては重要な」とよ。強者との戦いは
我を満たしてくれる。

ルセリア・エトワール。お前は最高の強者だ」

「っ！」

め、迷惑なっ……私は別に戦いたいわけじゃ
ないです！」

「……どうして。」

私、今——一瞬、嬉しくなったの……?」



「っ！あれは……街の人!?」

「危ないです！早くここから逃げてください！」

「エトワール……また戦ってるのかよ」

「ずっと決着付かず……どうせ八百長だろ」

「えっ……?ち、違います！」

「この人は、機械帝国ギアロスの幹部で……！」

「侵略者なんて言って、全然そんな素振り見せてないじゃないか」

「それは、この人が正々堂々と戦うのが好きなだけだから……！」



コツッ！

「痛っ……い、石………？」

「うるせえぞ売女^{ビッチ}！てめえそいつとグルなんだから！」

「考えてみたらお前だって異常な力持ってるじゃねえか。仲間割れしてるフリして油断させようってか」



「ち、違っ……やめてっ、お願いっ………！」

「何で……私、皆の為に戦ってるのに………！」

「石投げないでっ……あうっ！」

「こんなの、酷い……助けて、お見さん………！」

「黙れ、人間」

ブンッ！ガッ！

「うわあああッ！」

「……っ？」

「軽く吹き飛ばしたただけだ、殺してはいない。

お前は人間が死ぬのを望まないだろう」

「ど、どうして……」

「……我が認めたお前が、罵倒されるのを黙って
見てられなかった。

身体が勝手に動いた、というやつだ」



「わ、私の為に……あの人達を……？」
「……………」

（この人……私を思って、怒ってくれたんだ。
敵のはずの私のことを、そんなに……）

「く………」

「ど、どうしたのっ！」

「……情けない話だ。強さを求めて身体の一部を
機械化したのが、戦いの後はいつも生身の部分が
昂って収まらなくなってしまう」

「昂って……あっ！」



（あ、あれ……股間のところが、膨らんで……）
「済まない。今日のところは退かせてもら——
う、くうっ！」

「だ、大丈夫っ!?」

（……この人が膝をつくなんて、初めて見た。
それだけ辛いつてことなんだ）

「大丈夫、だ……」

「……………」



「……む、向こうに行きます」

「エトワール……？ 何故我の肩を支える？」

「……一度、助けてもらいました。だったら私も貴方を一度は助けないとフェアじゃありません」

「その、雄の昂りは……」

「戦いじゃ、収まらないものでしょう？」

「エトワール……」

「お見さん……ごめんなさい。」

「でもこの人は……悪い人じゃないから……！」





「だ、出してください」

「エトワール……だが……」

「私だって緊張してますっ。」

でも……貴方が辛そうなのは、私も望むところではありません」



『……すまない、エトワール』

（口で……ちっと口でするだけ。大丈夫、知識はある）
「私なりに、頑張るので、何かあればすぐに言っ」



ボロンッ

「きゃあっ!!」

(お、大きっ……!? こんな……)

昔、ちらっと見えちゃったお兄さんのとは、比べ物にならない……!!



「エトワール、無理をすることはない」
「……ちょっと、驚きました。でも、それだけです。」
「そ、それじゃあ、いきますね……」



「あむ………じゅるっ………」

（まずは……舌全体を使って全体を刺激しながら様子を見る）

「うっ………」

（裏筋のどろろの反応が良かった………じゃあそこを舐めあげて………）



「れろ……じゅぶぶっ……じゅるんっ」

（唾液は少し溜めてから塗るように舌に乗せて……）

時折鈴口を舌先でつつくようにする。

とにかく刺激に慣れさせないように変化を加えながら……）



「あれ？　そういえば私、どうしてこんなこと知って.....」



「恩に着る、エトワール。
惚れた女の奉仕がこれほどとは知らなかった」



「ッ!?」

（好いた、女……? い、今……そう言った……!?）

「……口が滑った。忘れてくれ」

（この人は、機械帝国の幹部……侵略してきた敵、なのに……）

ドキ



ドキ

（なのに私、何でこんなにドキドキしてるの……!?）
「我とお前は敵同士。」

だが……出来れば違う出会い方をしたかったものだな」
（やめて……そんなこと、言われたら、私……っ!）

「私、貴方が……貴方のことが……っ♡」



「じゅるるるッー！ じゅぶッ、んじゅるるるッー！」

「う、おおっ………！ エトワール、いいぞ………！」

（喜んでくれてるっ………♡ 私のフェラチオで、この人が喜んでるっ♡
飲み込みたい、この人のおちんぽ、喉の奥までっ♡）



ミゃほっ♡

ミゃほっ♡

「じゅぽっ♡じゅぽぽっ♡じゅぽっ♡」

（太くて、遅しい、雄ちゃんぽ……♡）

こんなにも格好良くて、こんなにも愛おしくて……っ♡）

じゃあ♡

じゃあ♡

（そっか、私、とっくにそうだったんだ♡

この人はお兄さんと同じ——いざという時に私の側に居てくれて、
私のことを思っで行動してくれて……

そして……お兄さんと違って、とっても——私よりも強い『雄』♡）

（そんなこの人が……オルディス様のことが、好きなんだ——♡）

にゃん♡

にゃん♡



「少し、待ってくれ、エトワール……!!」

「じゅるっ……♡ あ、はあ……♡」

「……ふう。お前の気持ち、しかと受け取った。

なればこそ改めて伝えねばならない。

我と共に歩んでくれ、エトワール」



「……は、はい……♡」

私も……オルデイス様と共に、歩んでいきたい、です……♡」

「そうだ。我のモノに——我に忠実な雌^{スレイドール}奴隷となってくれ」

（スレイ、ドール……）

それになれば、オルデイス様と一緒に居られる……♡」



「んっ……ちゅっ……」

「――誓いの口づけ、と受け取るぞ」

「……んちゅっ♡」

（お兄さん……ごめんなさい。

でも私、オルデイス様のモノになりたいんです……♡）




~~~~~愛しています、オルデイス様……♡~~~~~

















「んじゅるっ♡じゅるっ、れろっ♡

ちゅっ、じゅるるっ♡じゅるるっ♡♡♡♡♡」





「れろっ♡んちゅっ……♡おるひゅ、はまあっ……♡  
んじゅるるるっ♡じゅぶぶぶぶっ♡♡♡」



「にくく……ようやく認めてくれましたねえ」







「シンギュレーション763——ここまでかかるとは。

素晴らしいです、ルセリア・エトワール……♪

……あ、オルデイス様、いらっしやったんですね。

タイミングよくこちらにも今進展がありました」





「以前エト<sup>彼</sup>ワール<sup>女</sup>に植え付けたオルデイス様への恋愛感情ですが、その促進と発芽を促していました。

今、エトワールは仮想現実へとダイブして、疑似体験を獲得してます。

あ、当然、顕在意識はありません」



「内容としてはオルデイス様との戦いの再体験、そして人間への  
信、頼、の喪失です。」

正々堂々と戦うオルデイス様と対比して醜さを出すことで、  
オルデイス様への忌避感を失くして徐々に信頼感を積み上げました」





『この人は生粋の悪ではないのかもしれない』  
『自分が護ろうとしている人間は弱く醜い』  
『強く逞しい雄には従うべき』——そんな思想になるよう  
少しずつ思考を誘導していきます』





「特に想い人である『お兄さん』——エトワールのパートナーである  
年上の幼馴染への気持ちは弄らないようにしつつ、  
オルデイス様の『強さ』を魅力的に感じるようにするのは骨が  
折れました……相当に心の支えになっているようですね」





「そこを弄ってしまったたらルセリアとしてのカそのものを失ってしまう  
リスクがあったからですね。」

今現在はカ  
の制御権を奪  
って改変して  
ドールスーツ  
を展開して  
いますので、  
カそのものを  
失ったらそれ  
も消えてしま  
います」

じゃあ、  
っ♡



「何より、そんなエトワールにはオルデイス様がご興味ないでしょう？  
強く凛々しいエトワールだからこそオルデイス様も関心を持たれた  
わけですし」

じゃあ、  
♡



「ですので徐々に徐々に思考誘導を行いまして、  
シミュレーション763回目——エトワールの意識上の体感時間では  
約2年程の『調整』を以て、ついにオルデイス様への愛情を自覚し  
自ら頭を垂れるに至りました♪」

じゃほっ♡

じゃほっ♡



じゃあ♡

じゃあ♡

「にへへ……オルデイス様のモノを模した生体ペニスへのしゃぶりつきを  
見ればわかるでしょう？」

「あれはもう雄に媚びて奉仕する悦びを覚えた一匹の雌です」



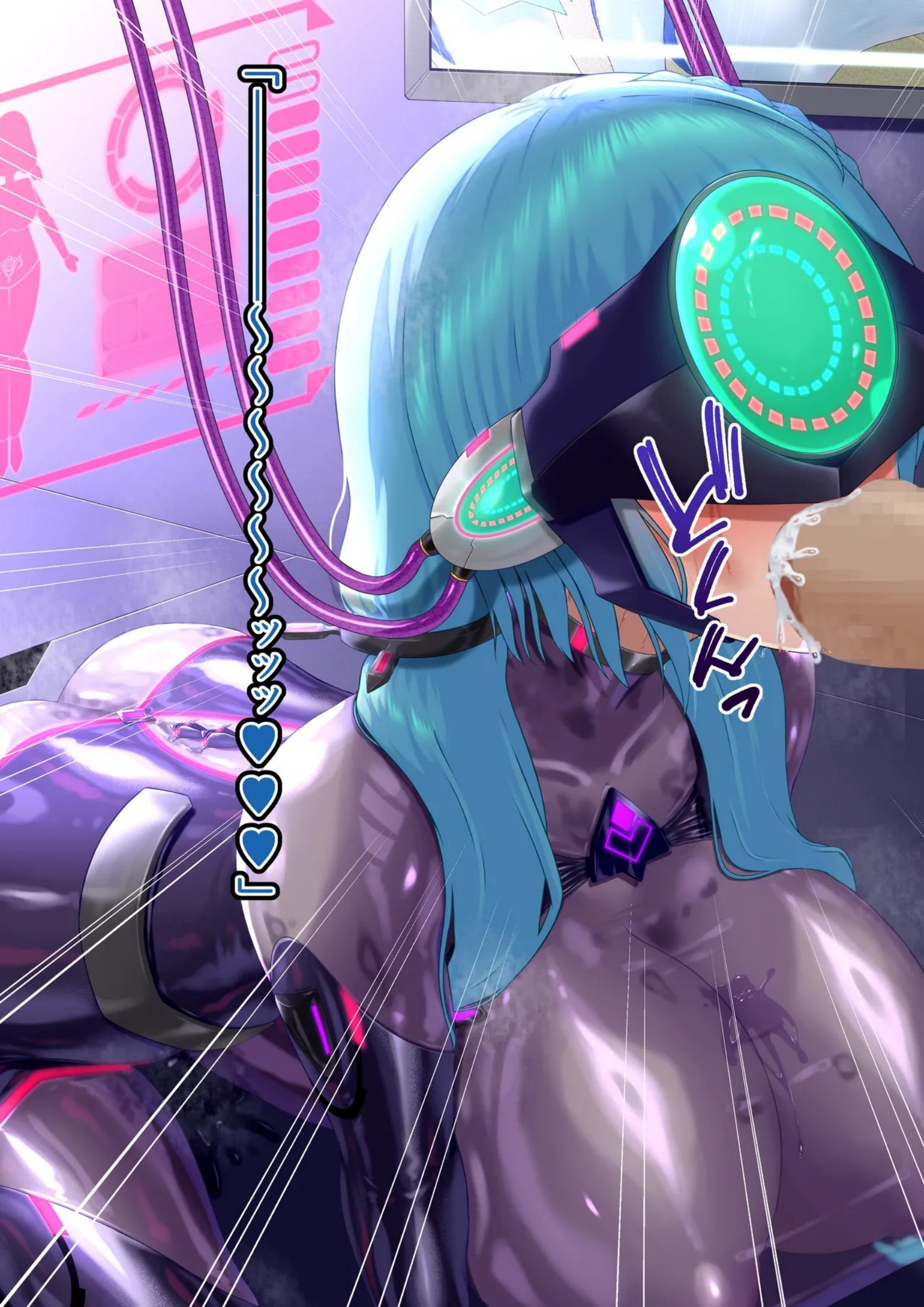
ちゃほっ♡

ちゃほっ♡

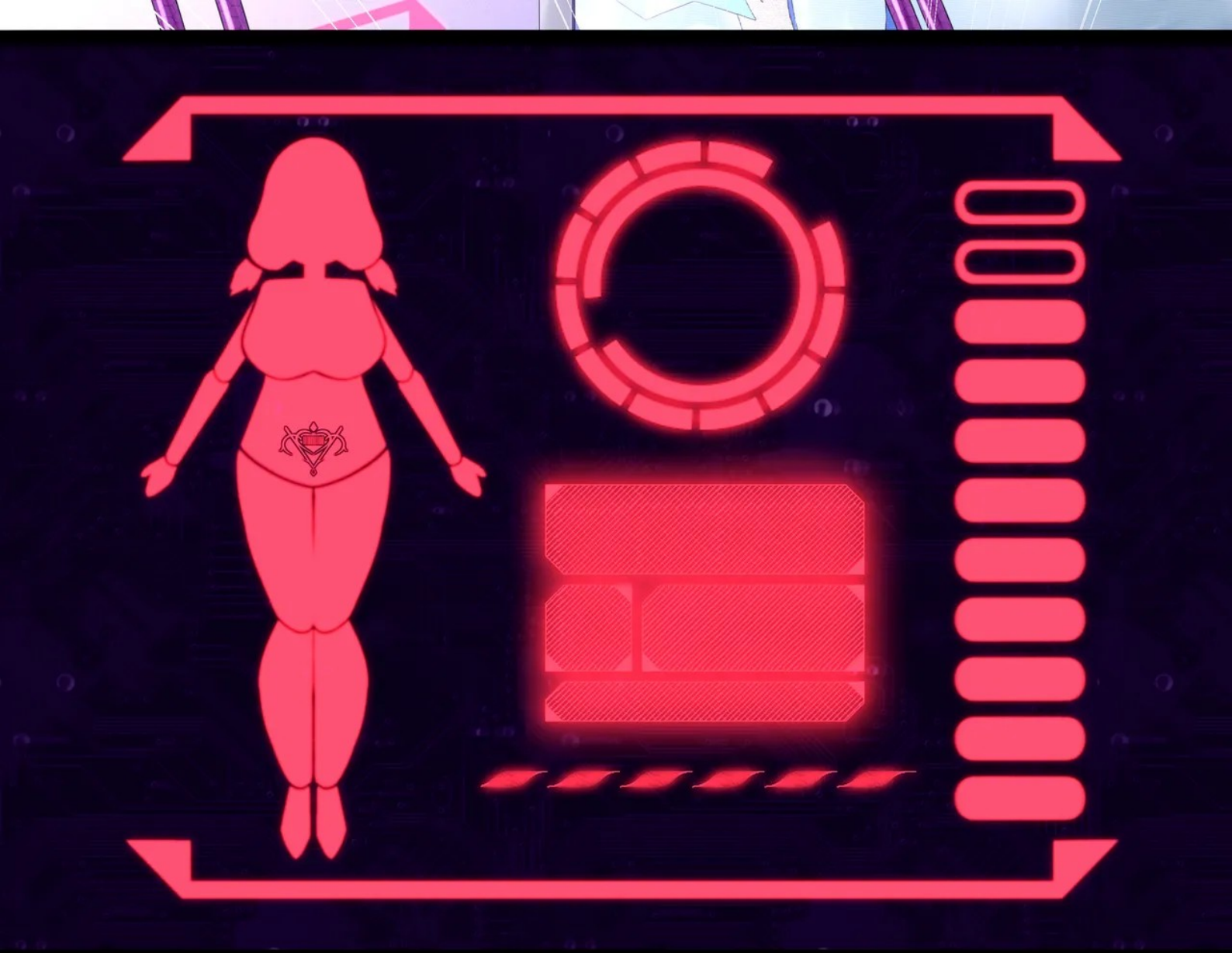
「勿論、射精機能もついていますので、ちゃんとご褒美を上げられるようになっています。」

「恐らくもうじきフィニッシュのはずです——」

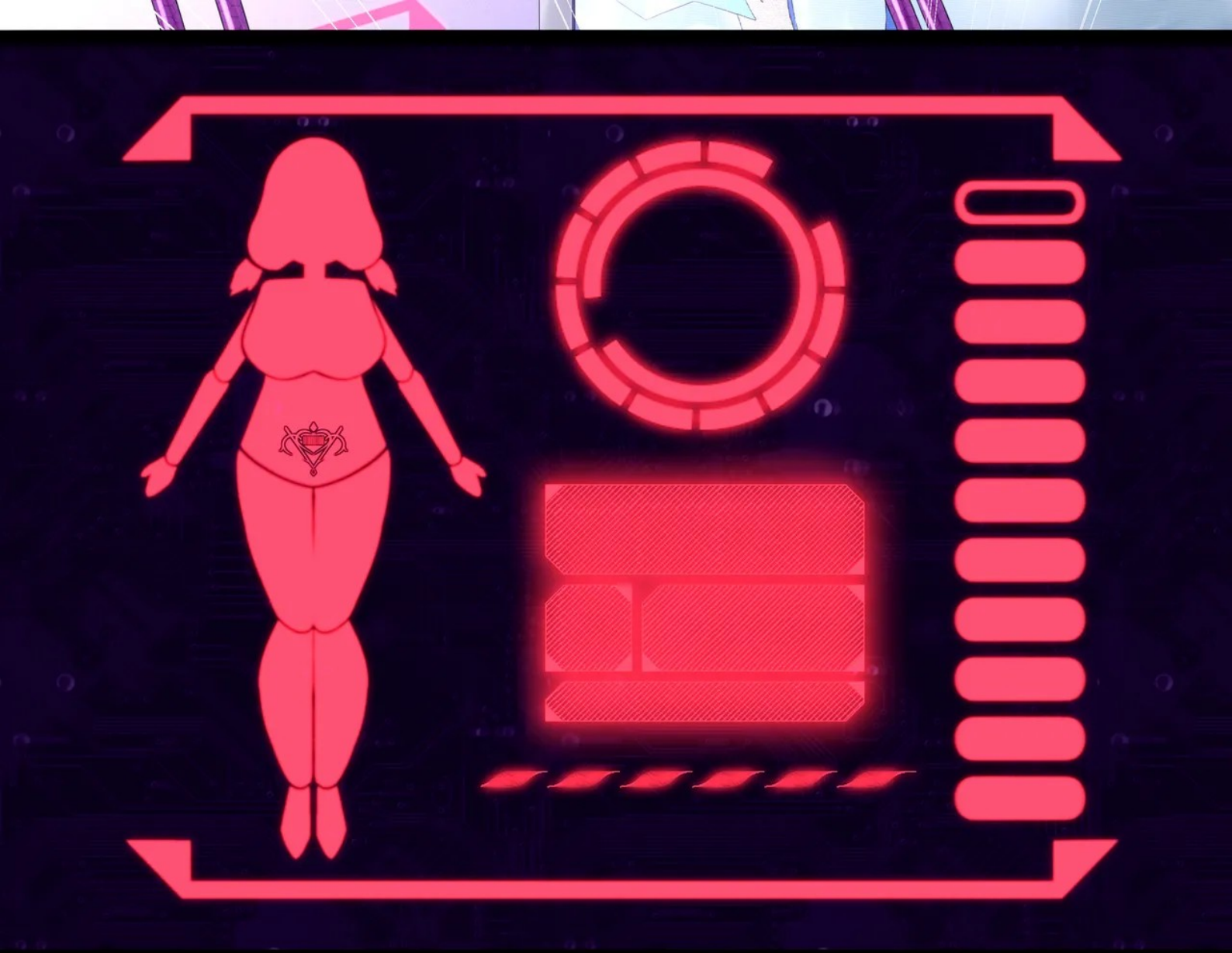














[illegible]

「にへへ、美味しそうに飲んでますねえ……」

五感も適応済みですので、オルデイス様の精液の味や匂いでももうエトワールは極上の悦楽を得られる身体になっています」



「……………うん……………」





「うっはああう……♡」







「ちゃんと口内見せの作法も出来ていますね。

後はこれを300回程度繰り返して完全に刷り込めばほぼ完成です。

——どうでしょう、オルディス様。

最後はオルディス様ご自身でエトワールにトドメを刺してみませんか？」





『……にへへ、その様子だと聞くまでもなかったようですね。  
手筈は整えますので、オルディス様はその時が来るまで  
英気を養われていてください。』

——最高のスレイドール完成式をお届けいたしますので♪』



「ですので、しっかり仕上がりましょうね、エトワールさん♡」







「はっ♡はっ♡はっ♡はっ♡——愛しています、オルディス様♡」